

プロと出会い、プロを知り、プロと交じり合う

—神奈川県立音楽堂の「先生のためのアウトリーチ」が目指す先—

瀧川 淳（国立音楽大学 教授：音楽教育学）

神奈川県立音楽堂（以下、音楽堂と略称）が主催する「先生のためのアウトリーチ」は、2021年からスタートし今年で5年目を迎える。子どもを対象としたものやアーティストの育成としてアウトリーチ事業を展開する団体や機関が多い中、一貫して「先生のために」アウトリーチを行うホールは珍しいのではないだろうか。

2025年度は、8月（音楽堂）と11月（ラゾーナ川崎プラザソル）に作曲家の宮内康乃さん（8月、11月）と打楽器奏者の若鍋久美子さん（8月）を迎えて開催された。今回、筆者はその両方に関わることができた。その観点から音楽堂が主催する本企画の意義について少し述べたい。

まず「アウトリーチ（outreach）」という言葉は、「手を伸ばす、差し伸べる」という意味を持つ。アウトリーチを行う場や活動形態は様々だが、音楽の場合、アーティストや音楽団体・機関が、音楽に普段触れる機会の少ない人々に直接働きかけて、音楽を普及する活動を指す。齋藤豊<sup>(1)</sup>は、学校音楽におけるアウトリーチを「鑑賞系」「創造系」「技術指導系」の3つに大別している。その内、音楽堂が目指すそれは「創造系」に位置付けられる。

打楽器奏者の若鍋さんは、会場に運び込んだ世界中の様々な打楽器が持つ音色に対して参加者の身体をひらき、またそれらを使った音のコミュニケーションを通して、彼女が考える「ビートやグルーブ」の体感を目指した。彼女は、「同じ瞬間を共有しながら、自分の動きや音が他者に影響を与え、呼応し合うことで得ることのできる一体感が、音楽の喜びだ」と言う。これはまさに学校の音楽授業という場で、先生が子どもたちと共に目指す音楽活動と同じではないだろうか。

作曲家の宮内さんもまた音楽によるコミュニケーションを大切にし、音楽を学ぶことは、他者との接し方を学ぶことだと主張する。彼女が主導した声による作品づくりは、楽譜を必要としない簡単なルールに基づいている。そのルールに基づいて、緊張感を持った静けさの中、声の持つ多彩なニュアンスによって生み出される微細な揺れを感じ取ることで生み出される空間を生み出すことで、参加者の身体をひらき、他者と共に即興的に音楽作品をつくりあげた。

参加した先生たちにとってこれらの活動は、学校の音楽づくり（創作）の授業で目指される即興的な表現を通して音を音楽にしていく過程そのものである。つまり、プロのアーティストたちの音楽活動を支える理念や考え方は、実は学校で実践される音楽活動と親和性が高いのである。このことを参加者全員は体験を通して感じ取り、その感じ取ったものをその後のディスカッションを通して言語化することで、より確かな実感とした。

このように、音楽堂による「先生のためのアウトリーチ」の大きな特徴は、参加者が実際のアウトリーチを体験し、その体験についての対話を通して他者の感じたことを共有することで、自分の体験をバージョンアップする点にあるのではないだろうか。さらに言えば、アーティストと参加者である先生たちの間を結ぶコーディネーターの存在も重要である。コーディネーターのファシリテーションにより、音楽と学校の世界が結びつき、さらに各自の体験が全体で共有される。その結果、明日からでも学校現場で使うことのできる実践のアイデアへと還元されるのである。

ところで筆者は、音楽堂の「先生のためのアウトリーチ」を「教える一学ぶ」とい

う関係性ではなく「刺激し合い化学反応を起こす」場として認識している。なぜならアーティストも先生もそれぞれの世界の「プロ」だからである。アーティストたちは日々、芸術としての音楽の世界を追求している。また先生たちは日々、音楽の教育を追求し実践している。コーディネーターの仲介によってこの両者が会うことで、音楽、そして教育の世界に新たな化学反応が生じ、それによってそれぞれの世界のオーセンティシティ（真正性）により深く触れることができると考えている。

「先生のためのアウトリーチ」を通して、お互いにプロであるアーティストと先生たちが対等の立場で交流を重ねることで、お互いの意識が高次に磨かれる。そして、ここから生まれた知見が子どもたちの音楽活動に還元されていくことを考えると、この研修会が持つ意味は大変重要ではないだろうか。

（１）齋藤豊（2013）「音楽の授業におけるアウトリーチ活動の展開」『音楽教育研究ジャーナル』10（2）、pp. 71-79.